

### 分身の寓話--アラン・マバンクの『ヤマアラシの回想』を読む

元木, 淳子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

57

(終了ページ / End Page)

70

(発行年 / Year)

2008-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003280>

## 分身の寓話

——アラン・マバンクの『ヤマアラシの回想』を読む——

元 木 淳 子

### 1. はじめに

「分身」は、現代アフリカ文学に広く見られるモチーフの一つである。サンゴールはその詩「我にコーラとバラフォンの伴われんことを」において、夜ごと、留学先のフランスから故郷のセネガルに飛んでゆく自身の「分身」について詠っている。また、アマドゥ・クルマの小説『独立の日々』では、主人公が都会で死んだ瞬間に、遠く離れた生まれ故郷の村にその分身が姿を現す。

「守護霊」もまた、アフリカ文学には親しいテーマである。チヌア・アチェベの小説『崩れゆく絆』では、守護霊「チ」の教えに背いた英雄が、運命の坂を転落していく。エモス・チュチュオラの小説『椰子酒飲み』では、守護霊「ジュジュ」の加護を得て、主人公は死者の国に椰子酒作りを探す旅に出る。

さらに「トーテム」も馴染みの主題といえる。カマラ・ライの自伝的小説『アフリカの子』では、主人公の父のトーテムである黒蛇が未来を予告する。アマドゥ・ハンパテ・バの『ワングランの不思議』では、トーテムのニシキヘビを誤って殺した主人公が運命に見放されてしまう。

これら諸作品に描かれた分身、守護霊、トーテムは、いずれもアフリカの伝統的死生観に深く根ざした存在であり考え方であるといえる。

さて、コンゴ共和国出身の詩人で作家のアラン・マバンク Alain Mabanckou のフランス語小説『ヤマアラシの回想』 *Mémoires de Porc-Epic* は、分身、守護霊、トーテムのすべてを主題に含んだ小説である。一匹のヤマアラシが、主人である人間の命令に従って毒針で人殺しを重ねる物語で、2006年にフランスのルノー文学賞を受賞した。

ところで、この小説の巻末には、作品がアレゴリーであるとの断り書きが付されている。寓話の形をとって小説は何を告げようとしているのか。「分身」をキーワードに作品の解釈を試みるのが本論の目的である。

そのためにまず、「ヤマアラシの回想」の分身像が、伝統的の死生観をどのように反映したものであるのかを考察する。ついで、「ヤマアラシの回想」の分身像と、マバンクの他の作品における分身像とを比較する。最後に、「ヤマアラシの回想」の分身像のアフリカ文学における独自性を検討しよう。

## 2-1 アラン・マバンクの人と作品

アラン・マバンクは、コンゴ共和国（首都ブラザビル）に1966年に生まれた。幼少時代を港湾都市ポワント＝ノワールで過ごし、コンゴとフランスの大学で法律を修めた後、2002年まで十年余りフランスのスエズ＝リヨン水道社に勤めた。この間、詩や小説を発表し、1995年、フランス詩人協会のジャン＝クリストフ賞を受賞。メディア・トロピカルでラジオ文化番組のプロデュースなども手がけた。2002年からミシガン大学で、2006年からはカリフォルニア大学でフランス語圏文学を講じている。

小説『青-白-赤』(1998)<sup>(1)</sup>では、タイトルが示すように三色旗の国フランスで一旗揚げようと海を渡ったコンゴ人青年が、移民社会の犯罪に巻き込まれ、故国に強制送還される顛末を描いている。

『アフリカ心理学』(2003)<sup>(2)</sup>では、貧しく身寄りのないコンゴ人青年が、殺人を犯して社会を震撼させることで、自己の存在証明を得ようとする様が描かれている。

『割れたグラス』(2005)<sup>(3)</sup>では、「割れたグラス」と渾名される男が、アフリカの酒場に集う客たちの壮絶な人生模様をユーモラスかつグロテスクに書きとめていく。マバンクの作家としての名声を高めた作品で、「フランス語圏五大陸賞」などを受賞し、六カ国語に翻訳され、芝居としても上演されている。

『ヤマアラシの回想』(2006)は、前作の主人公「割れたグラス」の遺稿として設定されている。

グローバル化時代の作家として、マバンクはカリブにも熱い眼差しを注いでいる。2001年には、グアドループを舞台に、カリブとアフリカの流れる者

たちの交流を描いた小説『神のみぞわが眠りを知る』<sup>(4)</sup>を発表。2007年にはアメリカ合州国へ目を転じ、アメリカ黒人作家ジェームズ・ボールドウィンにあてた書簡の形式をとった『ジミーへの手紙』<sup>(5)</sup>で、アメリカ黒人とアフリカ人の共通項や差異について論じている。

## 2- (2) 『ヤマアラシの回想』における分身

『ヤマアラシの回想』は、ヤマアラシが自己史を語るという設定も奇抜ながら、その形式も実験的である。前作の『割れたグラス』と同様に、小説の冒頭は小文字から始まり、二百頁余りの本文中でピリオドは一度も用いられない。一匹のヤマアラシの息づかいがどこからともなく聞こえてきて、やがて消えていくといった趣きだ。時間も場所も定められていない。

小説の冒頭部分で、語り手であり主人公でもあるヤマアラシは、自分がキバンディという名の男の分身 double だと宣言する<sup>(6)</sup>。主人のキバンディが死んだので、本来ならば自分も絶命するはずなのだが、なぜか生きながらえてバオバブの大木の根元までたどり着いた。自分の命がいつまで続くのか不安だが、主人の命令をいかに遂行してきたかを語ろうと言う。分身のヤマアラシは四十二歳。普通のヤマアラシの寿命の倍は生きているが、分身稼業はつらいものだと訴える。

分身には、「平和的分身 double pacifique」と「害をなす分身 double nuisible」があるという<sup>(7)</sup>。前者は人間の主人と同じ日に生まれ、彼を守護する。主人が病気になるると介入してこれを救おうとし、主人が死ぬと分身も死ぬ。分身の力は祖父を通して伝えられる。特定の時に祖父が乳児をひそかにあやしてやると、祖父の身体から分身が離脱して、子の身体に入り込む。以後分身のおかげでその子は善行を積んでいくのだという。

一方、「害をなす分身」は「平和的分身」より数が少なく、限られた家族にしかその力が伝えられない。害をなす分身は、少年が十歳になった時に、本人も母親も兄弟姉妹も知らぬ間に、父親を通じてこどもの身体に入り込む。キバンディは幼い頃モサカという村で両親と暮らしていたが、ある夜、寝ているところを父に起こされる。少年が目を開けると、母のそばで眠っている父と、立って動いている父の二つの姿があった。立った方の父が、息子を引き立てて行き、マヤンブンビという秘薬を息子に飲ませる。少年は酩酊し、気がついた時にはそこに少年

自身の分身がいたという。この分身には、口と鼻がなく、目と耳とあごがあるだけだ。

さて、語り手は「害をなす分身」に属しているが、上述の「口なし分身」とは異なる動物の分身である。ヤマアラシの主人公が「害をなす分身」になるためには、森のヤマアラシ社会を離れて、主人の住む村のそばで一人暮らしをせねばならない。主人の第三の目となって、主人が見聞きできなかったことを夢の中で告げ知らせるのだ。主人公はヤマアラシながら、聖書も読めるし、白人の本の内容も理解できると豪語する。なぜかアフリカ文学にも通暁していて、有名な文学作品のタイトルをふんだんに織り交ぜておもしろおかしく弁舌をふるい、人間の世界を辛辣に批評する。

口なし分身はヤマアラシに食べ物を運んでやり、自身はヤマアラシのしとめた人間の血を食らっている。

人間社会に近づこうとする主人公に、ヤマアラシの長老が激怒し、主人公の親が猟師に撃ち殺された事実を思い出させて諫めようとするが、主人公は聞き入れない。

さて、キバンディの父は大ネズミの分身を持っていたが、年とともに自分自身がネズミのような形相になり、ついには夜大ネズミに変身して、次々に殺人を犯すにいたる。不審に思った村人たちが大ネズミをしとめたところ、キバンディの父も絶命した。残された母子は村人の報復をおそれてセケペンベという村に逃れ、主人公のヤマアラシもともに移動する。

十数年後、キバンディは父と同じく悪しき分身のあやつり手になる。初仕事として、美しい娘キミヌとその両親の殺害をヤマアラシに命じる。キバンディが求婚したのに、娘の父が金だけ巻きあげようとしたためだ。ヤマアラシは自分の毒針で任務を遂行する。その後も、傲慢なインテリ青年や、インチキな椰子酒作りなど、キバンディの気に入らぬ人間を次々に消してゆく。

だが、百番目の指令にヤマアラシは蹶く。キバンディに少額の借金をしていた貧しい農夫が、厳しく取り立てられて思わず貸し主を罵った。それを聞きとがめたキバンディが、農夫とその赤ん坊ユーラの殺害を命じたのだ。ヤマアラシは命令に従ったもののさすがに気がとがめ、主人への反抗心が芽生える。以来、ヤマアラシの仕事に失敗が混じるようになる。双子には霊力があるから攻撃してはいけないという分身界のタブーを犯して、近所の双子の腕白小僧に関わってしまう。

双子は、主人公がユーラを殺害したことを知っているかのようなそぶりを示す。この頃からキバンディも秘薬を飲んで痩せはじめ、言動に平静さを欠きはじめる。

ついに、双子とともに赤ん坊ユーラの幻が、キバンディと口なし分身とヤマアラシの前に姿を現す。主人はユーラ攻撃を命じるが、ヤマアラシは応じない。双子の足下にキバンディと口なし分身が倒れ、ヤマアラシはユーラに立ち去れと合図されるや、強い眠気に襲われる……。

目覚めて生きていたことに驚いたヤマアラシは、これからも命が続くなら、家庭を持ってみたい、よい分身にもなりたいなどとひとりごちるのだった。

## 2 - (3) 伝統的生死観と分身

人が自分の身体を外から眺める分身体験は、現在も臨死体験などとして報告されているが、アフリカ各地に見られる伝統的分身像に共通しているのは、それが空間の制約を超えて、主人とうり二つの「実体としてある存在」ととらえられていることだ。先述したサンゴールやクルマの帰郷する分身は、これに相当する。『ヤマアラシの回想』では、主人とそっくりな「口の無い分身」がこれに相当する。

また、守護霊は、人々の生の領域に関わり、人生の幸福や長寿、成功等をもたらす存在とされていて、しばしば特定の護符に宿っているとみなされる。護符を身につけ、守護霊を敬い、その教えを守ることによって、加護が受けられると考えられている。アチェベの「チ」やチュチュオラの「ジュジュ」などはこれに分類されるだろう。『ヤマアラシの回想』では「平和的分身」がこれにあたる。

ところで、人間の一族と動物の間に特別な関係を見るトーテムの考え方は、伝統的にアフリカで広く認められてきた。自分を守護してくれる存在が、特定の動物に宿っていると信じられるとき、人はその動物をトーテムとして保護する。カマラ・ライの父親は黒蛇を、母親はワニをトーテムとしていた。

だが、動物がつねによき守護霊を宿すとは限らない。「アフリカに自然死はない」とはしばしば耳にする言説で、この小説にも現れる<sup>(6)</sup>。人の死にはすべからず原因が求められ、他者による呪いが死の根柢とされることもある。呪いの悪霊が動物に変身すると考えられる場合もあるのだ。カリクスト・ベヤラの『太陽に灼かれて』にあるように、悪霊が夜、フクロウなどの鳥に姿を変えて、呪いをか

けようとする者の家の屋根に止まるといった言い伝えは広く流布したものである。

また、トーテムにおいては、特定の動物が人間の変身した姿と見なされることがある。マバンクと同郷のコンゴ人作家シルヴァン・ベンバの小説『太陽はベンバに去った』(1982)には、1930年代フランス植民地支配下のコンゴ＝ブラザビルで起こった殺人事件についての記述が見られる。

それによると、兄による弟殺しが行われたのだが、フランス植民地の裁判所は、「原住民のアニミストとしての心性」<sup>(9)</sup>に照らして、「兄が草原でチンパンジーを撃ち殺したところ、これが実はチンパンジーに変身していた弟で、駆け寄ってみるとそこに弟が死んでいた」と考えられると述べ、「兄に弟殺害の意図はなく、無罪」の判決を下したというのだ。『ヤマアラシの回想』のキバンディの父の死も、これとまったく同様に説明されている。

したがって、『ヤマアラシの回想』は、アフリカの伝統的分身観、とりわけコンゴのトーテム観に深く根ざした作品だといえよう。

## 2- (4) 分身の寓意

ところで、先述の『割れたグラス』では、主人公「割れたグラス」が、アフリカのとある酒場のオーナーで「頑固なカタツムリ」と渾名される男に依頼されて、店や客の歴史をノートに書き記した後、入水自殺する。死後、「頑固なカタツムリ」が遺稿を発見し、スイユ社に持ち込んで出版させたのが『ヤマアラシの回想』だとされている。『ヤマアラシの回想』の巻末には、「頑固なカタツムリ」が出版社に送った手紙が付され、それには次のような記述がある。「(・・・) 実のところ、彼(=「割れたグラス」)は確信していたのです。長く読み継がれる本というものは、世界を作り直し、幼年時代を再訪し、始原を問い、妄想に目をこらし、信念を揺さぶるものであると。(・・・) そこで「割れたグラス」は、寓意的なやり方で、彼の遺言書を作成したのです。彼にとって世界は、ある寓話からおおよそ解釈されるものに他ならないのですが、物事の物質的な表象だけを見ているかぎり、私たちがそれを理解することはできないのです」<sup>(10)</sup>

『ヤマアラシの回想』に「割れたグラス」はどのような「遺言」を書き込んでいるのだろうか。私たちはどのように寓話を解釈できるのだろうか。

一般に、マバンクの諸作品には「分身」や「影」や「亡霊」がしばしば登場する。

『ヤマアラシの回想』以外の作品で分身がどのように表現されているのか、『青-白-赤』（1998）を中心に見てみよう。

## 『青-白-赤』における「分身」

『青-白-赤』の舞台は現代コンゴのポワント＝ノワール。主人公の青年マサラ・マサラは高校を中退し、仕事もなく、両親と妹とともに貧しく暮らしている。同郷で年上の青年モキはフランスで活動していて、休暇で帰省しては羽振りよく振る舞い、親のために立派な家を立てて孝行も尽くし、娘たちのあこがれの的だ。

モキが帰省すると、二人の弟が兄から贈られた最新ファッションに身を包み、「ロボットのように」<sup>(11)</sup>兄にかしづいて、スポークスマンの役を務める。

モキに魅せられた主人公は、彼のようになりたいと願って後を追いつつ、いつしか自分の個性を失って、モキの影 ombre のようになる。顔かたちは似ていないがモキの分身 double になったと自覚するにいたる<sup>(12)</sup>。モキの助けを得てパスポートを手にした主人公は、勇んで海を渡る。

だが、パリでの暮らしはマサラの想像を絶したものだ。住まいは取り壊し予定のアパルトマンの最上階で、電気もない。モキは移民の犯罪組織の頭領で、偽ブランド服を高値で売って荒稼ぎしていた。モキの下で、プレフェ（知事）と呼ばれる文書偽造の達人らが手足のように働いている。プレフェはマサラの後見人となり、彼のためにビザなどを不正な手段で調達してやる。

主人公はモキに憤りを感じるが、生き延びるには彼の命令に従うしかない。やがて、マルセル・ボナバンテュールという実在するアンチル人の身分証明書を与えられ、マサラという名を捨てて、マルセルとして生きるよう命じられる。アンチル人の分身 double antillais<sup>(13)</sup>に変身するのだ。さらに、エリック・ジョスラン＝ジョルジュという実在するフランス本国人の身分証と小切手帳も与えられて、エリックにも人格分裂する se dédoubler<sup>(14)</sup>。一個の人間でありながら、複数の人物として生きることになるのだ。

そして、エリック名義の小切手帳を切って、地下鉄の駅で回数券を買い、売りさばいていたところを警察にとらえられる。

一年半の服役後、本国に強制送還されることになり、故郷の家族に顔向けできないと自殺を図るも未遂に終わる。やむなく帰郷した主人公だが、今度モキに誘



われたらまたフランスに行こうと考えるのだった・・・。

## 二つの小説

さて、『青-白-赤』と『ヤマアラシの回想』の登場人物には、以下のような明らかな対応関係が認められる。

『青-白-赤』		『ヤマアラシの回想』	
登場人物	属性あるいは行動	登場人物	属性あるいは行動
モキ	犯罪組織の首領 犯罪を指示	キバンディ	悪しき分身の主人 殺人を指示
モキの弟たち	モキのロボット モキに似ている	口なし分身	キバンディの分身 キバンディに似ている
プレフェ	モキの手下 マサラに偽りの身分証 をもたらす	口なし分身	キバンディの分身 ヤマアラシに食べ物 をもたらす
マサラ	モキの分身 モキに似ていない 詐欺実行犯 マルセルの分身 エリックの分身	ヤマアラシ	キバンディの分身 キバンディに似ていない 殺人の手下人

### 1) 主従関係

『青-白-赤』では、主人公のマサラは、別世界にあこがれてフランス行きを志す。モキの正体を知って衝撃を受けるが、生活のために主従関係はくずせず、彼に服従せざるをえない。モキはマサラの生殺与奪の権を握っている。

一方、『ヤマアラシの回想』では、主人公のヤマアラシは、別世界に興味を感じ、長老ヤマアラシの反対を押し切って人間社会に近づく。キバンディの命令に抵抗を感じるが、人間と動物の間には厳然たる主従関係があるので服従せざるをえない。主人は分身の生殺与奪の権を握っていて、主人が死ねば分身も死ぬと定

められている。

## 2) 中間的存在

いずれの小説でも、支配者と主人公の間に中間的存在が介在している。

『青-白-赤』では、支配者モキと主人公が直接口をきくことはほとんどない。モキが凱旋將軍よろしくコンゴに帰省すると、家には訪問者が押し寄せるので、スポークスマン役の弟たちが訪問者をさばき、主人公の用件は弟たちを通じてモキに伝えられる。

パリでも、モキはプレフェを介してマサラに犯罪の実行を指示する。プレフェはモキに絶対の服従を示す腹心の部下で、犯罪の手口を指導したりする。

コンゴでの兄と弟と主人公との間、およびフランスでの犯罪組織の頭領と幹部と実行役の間には階層関係がある。

一方、『ヤマアラシの回想』でも、キバンディがヤマアラシに直接命令を下すことはほとんどない。両者の間には口なし分身が介在して、ヤマアラシに主人の意向を知らせたり、食べ物運んだりする。

主人と口なし分身と動物分身の間には階層関係がある。

## 3) 分身の世界

『青-白-赤』では、フランスに移った主人公は、マサラとしてのアイデンティティーを奪われる。代わりに、マルセルとエリックというフランス社会に実在する人物になりすまし、分身として裏社会で働くことを強要される。見た目も中身もアフリカ人でありながら、フランス人やアンチル人の分身として活動する。生身の分身がうごめく世界の住人となるのだ。

一方、『ヤマアラシの回想』では、人間の世界に移った主人公は、ヤマアラシの長老によってヤマアラシ社会では死亡したものとして処理され、ヤマアラシとしてのアイデンティティーを奪われる。代わりに、主人からグンバ（土地の言葉でヤマアラシの意）と呼ばれる「害をなす分身」となり、殺人の下手人として働かされる。見た目も中身もヤマアラシでありながら、「害をなす分身」として活動する。生きた分身がうごめく世界の住人となるのだ。

『青-白-赤』は、フランスの移民社会の犯罪組織をリアリスティックな文体で

描いている。『ヤマアラシの回想』は、アフリカの村の連続殺人を寓話的に描いたものだ。犯罪の場所や内容は異なっているが、両者の犯罪組織は構造的に似通っている。このことから、『ヤマアラシの回想』を、『青-白-赤』で描かれたような犯罪組織のありようを寓話的に描いたものとする解釈が成り立つ。

## 2 - (5) マバンクの分身の独自性

### 語り手としての分身

アフリカ文学における『ヤマアラシの回想』の分身の独自性は、まず、動物の分身が主人公であり語り手となっている点にある。

たしかに、多くのアフリカ人作家が「分身」について語ってはいる。だが、分身が主人公となって、自身を全面的に語った作品はなかった。また、動物が語ることは、民話の世界では「自然な」振る舞いだが、現代アフリカ文学においては独特である。

そもそも、分身にせよ動物にせよ、この世とあの世、表社会と裏社会、人間界と動物界といった二つの世界に関与し、両世界を目撃する存在でありながら、これについて語るることのできない存在である。動物の分身という、二重に語りえない存在にあえて発言させることによって、寓話の世界の枠組みの中で、主人に属する世界と自身の世界を、主人に従属する者の立場から批判的に語りえたといえよう。

### 悪しき分身

さらに、マバンクの分身の独自性は、「善き分身」ではなく「悪しき分身」を追求した点にある。ベン・オクリの『満たされぬ道』のように邪悪な分身を描いた作品はあるが、「悪しき分身」を主役に据えるという設定はマバンクに独自のものだ。

そもそも、マバンクの小説では異常な性犯罪や殺人にみちた世界が描かれる。そこに登場する人物たちに特徴的なのは、彼らが内的必然によって犯罪に手を染めるというよりは、酒や薬物といった外的な作用によって異常な人格、悪しき分身に変身して犯罪を犯してしまうという点である。

『神のみぞ我が眠りを知る』では、酒で身を持ち崩した男が、妹の献身のおか

げで更生して平穏に暮らしていたところ、ある日、悪霊のような見知らぬ男たちが唐突に現れて、主人公を酒場に連れて行く。酔わされた男は帰宅して姪に暴行を働き、永遠に更生の道を断たれてしまうのだ。

また、『割れたグラス』では、酒で破滅した男たちが酒場に集い、その悲惨な人生を語る。それを書き留めた「割れたグラス」も、酒が原因で職を追われた元小学校教師なのだ。

『アフリカ心理学』では、主人公が、町の「浄化」を図るために娼婦を殺害しようと計画するが、実行直前に酒を飲み、計画を台無しにしてしまう。

そして、『ヤマアラシの回想』では、少年キバンディは自分の意志に反して「秘薬」を飲まされ、悪い分身の使い手となり、さらに薬を飲みつづけて、いよいよ陰惨な殺人狂になっていく。

ところで、次々に殺人を重ねていくヤマアラシの姿は、アマドゥ・クルマの『アラーの神にもいわれはない』で描かれた、リベリア内戦時のこども兵の姿にも重なりあう。当時、身寄りのないこどもたちは、内戦の首領たちに雇われ、薬物を飲まされて恐怖心をとりのぞかれ、前線に送られていったのだ。毒針を立てるヤマアラシは、銃を持たされたこども兵の恐ろしい寓意とも読める。

## 分身と主人

分身の、主人に対する強い帰依の感情を描いたのも、マバンクの独自の点である。

「強い人間」を自分の人生のモデルとし、師と仰いで、彼に絶対の服従を捧げ、自分自身の考えを持たず、あくまで師の影あるいは分身として生きようとする人間の心理は、マバンクが追求するテーマの一つである。彼の小説の主人公はすべて男性（ヤマアラシの場合はオス）なので、厳密には、偶像に盲従する「男の心性」の探求といってよい。時にはあこがれの対象が悪の化身と知っていながら、主人公はなおも、彼のために働こうとする。主人が悪の化身であった場合、分身の生きる道としては、主人と合一して自分も悪の化身となるか、あるいは、主人から離れて更生するかしかない。

分身の、主人に対する服従心がどれほど強いものであるのか、あるいは、どのようにしてそこから自由になることができるのかをマバンクの作品は問う。

『青・白・赤』の主人公は、崇拝していた先輩が犯罪組織の頭領だと知った後も、

彼の影響下を脱しようとはしない。また『アフリカ心理学』では、貧民街に育った孤児が、暗殺者として悪名をはせた同郷の男を師と仰ぎ、暗殺者の死後、その弟子として自らも殺人を犯そうと試みる。

一方、『ヤマアラシの回想』では、主人にひたすら忠誠を尽くしてきた分身が翻意する可能性がかいま見られる。赤ん坊殺しに気がとがめたヤマアラシは、最後には主人の命令を拒むにいたるのだ。自己放棄した分身として生きようとした者が、その過程で内心に大きな葛藤を抱え、心理的な囚われの状態から脱却しようとする姿が書き込まれている。

### 3. 結論

『ヤマアラシの回想』は、アフリカの伝統的な死生観を下敷きとした小説である。一見途方もないお伽噺のようでありながら、その実、分身や精霊などがリアリティーを持って受け止められているアフリカの社会の「今」に根ざす小説でもある。空想性と現実感がない交ぜになった作品といえよう。

『ヤマアラシの回想』をマバンクの他の小説『青・白・赤』と較べてみると、両者が非常に似通った構造を示していることが分かる。フランスにおけるアフリカ人移民の犯罪組織の現実を写実的な手法で描いた『青・白・赤』に照らせば、『ヤマアラシの回想』はポストコロニアル・アフリカの裏社会の寓話として読める。この意味で、『ヤマアラシの回想』は、植民地時代のナイジェリア社会の不条理を、民話の語りにも託して表したチュチュオラの『椰子酒飲み』の系列に連なるものといえるかもしれない。『椰子酒飲み』が、奇想天外な冒険譚でヨーロッパの読者をとらえたように、『ヤマアラシの回想』も、ユーモアとグロテスクと不思議の混交する民話の語りにも託して、現代のアフリカ社会を描き出し、フランスの読者を獲得したといえる。

アフリカ文学における『ヤマアラシの回想』の独創的な点は、「悪しき動物分身」を主人公に設定し、「悪行を命じる主人」だと知りながら、彼の影となって働くことを承知した「弱い立場の存在」の心性を描いたことにある。その上で、主人に服従しつつけた「分身」が、最後に踏みとどまって悪の命令を拒むという結末を与えることで、破滅的なシステムに囚われた存在が、自らの意志で自らを解放する可能性を書き込んでいるといえよう。

ところで、寓話という形式の興味深いところは、読者を巻き込んで種々の解釈を誘う、その懐の深さにある。命じられるままに殺人を重ねてゆくヤマアラシは、アフリカの内戦時のこども兵の姿とも読める。また、主人の悪しき命令に異議を唱えず黙々と従うヤマアラシであれば、アフリカにかぎらず、どの社会にも見いだせる。その意味では、ヤマアラシは独裁的な支配を下支えする存在の寓意ともいえるだろう。

### 註

- (1) Mabanckou, Alain, *Bleu-Blanc-Rouge*, Paris: Présence Africaine, 1998.
- (2) Mabanckou, Alain, *African Psycho*, Paris: Le Serpent à Plumes.2003.
- (3) Mabanckou, Alain, *Verre Cassé*, Paris: Editions du Seuil, 2005.
- (4) Mabanckou, Alain, *Et Dieu seul sait comment Je dors*, Paris: Présence Africaine, 2001.
- (5) Mabanckou, Alain, *Lettre à Jimmy*, Paris: Fayard, 2007.
- (6) Mabanckou, Alain, *Mémoires de Porc-Epic*: Paris, Seuil, 2006, p.11.
- (7) Ibid., pp.15-16.
- (8) Ibid., p.140.
- (9) Bemba, Sylvain, *Le Soleil est parti à M'Pemba*, Paris: Présence Africaine, 1982, pp.134-136.
- (10) Mabanckou, Alain, *Mémoires de Porc-Epic*, Seuil, 2006, pp.228-229.
- (11) Mabanckou, Alain, *Bleu-Blanc-Rouge*, Présence Africaine, 1998, p.66.
- (12) Ibid., p.39.
- (13) Ibid., p.162.
- (14) Ibid., p.126.

## 2007年業績リスト

### 論文

- 1) 「カリブの『嵐が丘』—マリーズ・コンデの『移り住む心』を読む—」『法政大学小金井論集』、第4号、2007年3月

### 評論

- 1) 「ヴェロニク・タジョの『イマナの影—ルワンダの果てへの旅』に学ぶ」、『ムエンゲ』37号、アフリカ文学研究会、2007年6月

### 報告

- 1) 「日本におけるアフリカ文学の翻訳」、シンポジウム『ブラックアフリカにおけるフランス語の文学へのまなざし』、東京日仏学館、2007年5月12日